3a
810
B823

國語

第四学年

上

文部省著作教科書

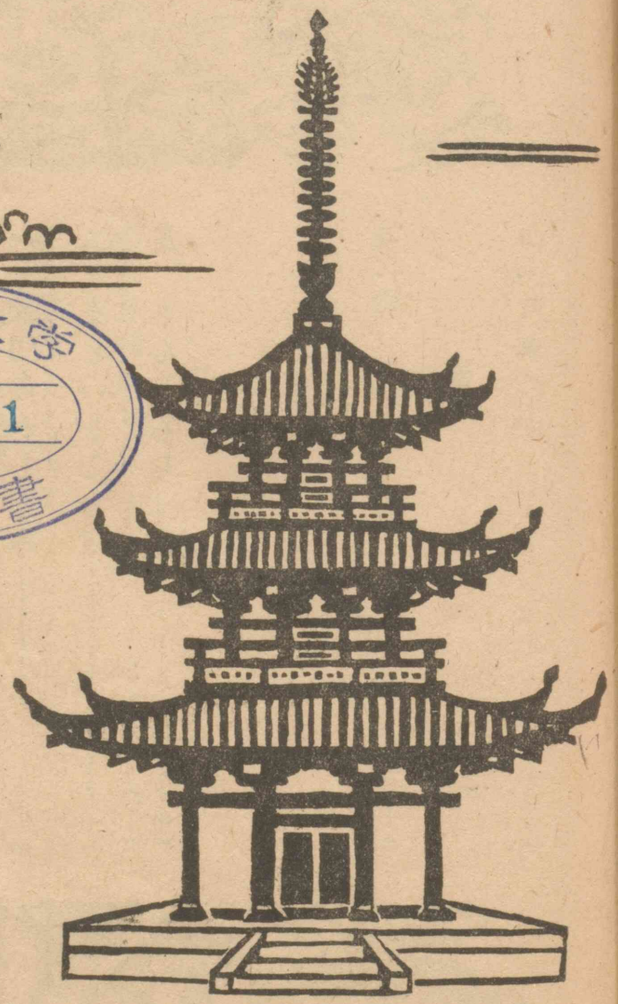
50504

教科書文庫

5
810
オ-1948
20000
67141

資料室

國語



広島大学
教
67141
図書

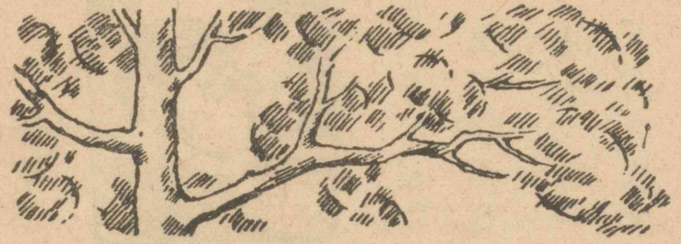
第四学年

上

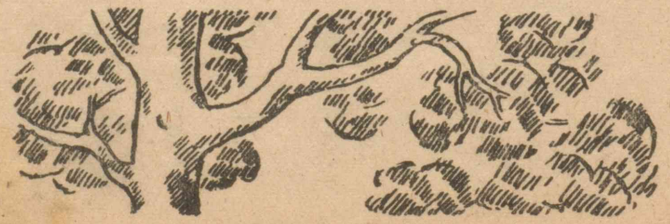
3a
810
B23

もくろく

一　校門のかしの木……四
二　手ということば……十一
三　もんしろちょう……十六
　（一）
　（二）
　（三）
　（四）
　（五）
四　汽車の中……三十四



五　作文……四十七
　（一）
　（二）
　（三）
六　月明かり……六十九
七　にげたらくだ……七十四
　一の場面
　二の場面
八　うさぎ日記……八十六



一　校門のかしの木

夜明けの風が流れてくる。中庭のキャベツが、なたねが、やぎ小屋が、ぼうっとあらわれる。どこかで小鳥が鳴いた。チチ、チチ、ピークイ、ピークイ、チチ、チチ。教室のまどは、まだねむりがふかい。

校門のかしの木は、目をさまして、しずかにしんこきゅうをした。

「さあ、きょう、いちばんはじめにくるのは、だれかな。」

かしの木は、子どもたちのことを、まず思いうかべる。

「あの白いブラウスの女の子かな。かばんをカチャカチャ鳴らして、走ってくる男の子かな。」

朝日の光がななめにさしてきた。校舎の半分が光った。校庭のつゆもいっぺんに光った。白いちょうが、ういたりしずんだりしながら、光の中をおよいでいたが、こんどは、思いきり高くとんで、屋根をこえて、うすべに色の空にきえた。

「きたきた。やっぱりあの男の子だった。きょうは、ぼうしをかぶっているな。赤い運動ぼうだ。」

かばんをカチャカチャ鳴らして、げたばこのかげにかくれた。つぎからつぎへと、子どもたちがやってくる。学校じゅうは、いちどに花がさいたようだ。

あちこちのまどがあいて、教室も目がさめた。わらい声がはじける。オルガンがひびく。

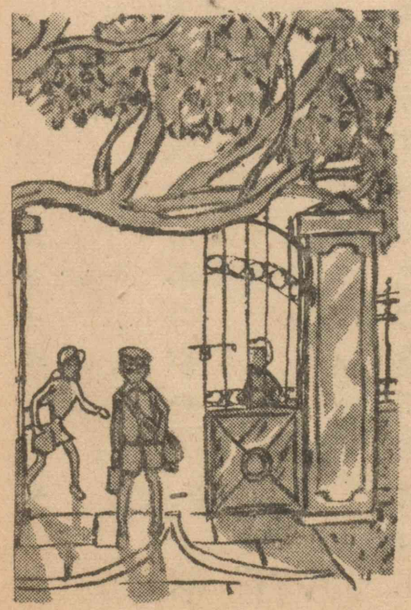
カラン、カラン、カラン。おけいこがはじまった。

「はい。「はい。」「はい。」

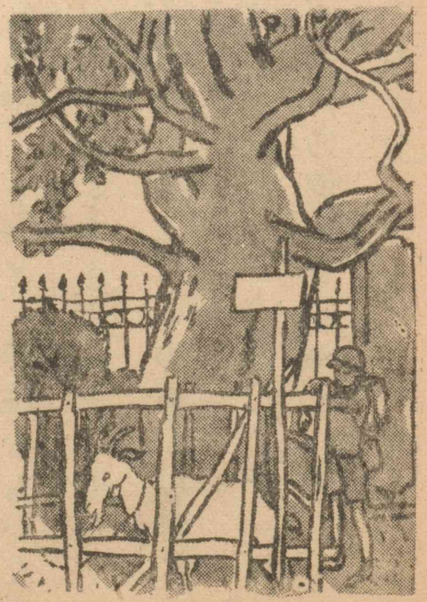
「先生。「先生。」

えんどうの花が、風もないのにゆれている。

「もう帰る子がある。一年生だ。手をつないで校門をで



ていく子ども、かたを組んで話しながらでていく子ども、ならったばかりの唱歌を、大きな声で歌っていく子ども、なんども手をふりながら、先生にさようならをして走って帰る子ども。



一どでいいから、風になりたい。風になったら、学校の中を、ちょっとひとまわりするのだ。ろうかをすうっと通ってみたり、かいだんをトントンあがってみたり、こうどうをのぞいてみたり、みんなが勉強する教室にはいって、こ

しかけてみたり――」

かしの木は、きょうもそんなことを考えた。

そうじがはじまった。ろうかをとおる足音がきこえる。バケツの音もする。水の音もする。学校のにおいがしてくる。

しおがひくように、子どもたちが、さっと、学校からいなくなってしまった。教室のまどは、どこもまぶたをとじる。すずめが、ときどき、チュンチュンと鳴く。その声が校庭にひびきわたる。

やぎが、つまらなそうに、夕やけの空をながめている。

しゅくちょく室にひがともった。白いカーテンが黄色くみ

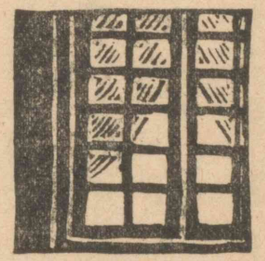
える。そこからラジオがきこえてくる。

星のちらばった青い夜空は、子どものクレヨン画と同じだ。

「わたしをうえてくれた卒業生たちは、どこにどうしているだろう。もう、四十五年にもなる。あの日からきょうまで、わたしのみたこと、きいたことを話したら、いくつあるだろう。アラビアンナイトのように、いろいろな話がある。春には春の話、秋には秋のものがたり。なん百人の子どもの顔、なん千人の子どもの心。毎年、新しく入学した子どもたちが、わたしのそばへやってきた。毎年、新しい卒業生たちが、わたしのそばからさっていった。」

おぼろ月が空にかかっている。さくらの花が、白くうかん

でみえる。



「わたしもりは、わたし船に子どもが乗ると、こっちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。わたし終ると、またひき返して、新しい子どもを乗せ、向こう岸へ運ぶ。先生のおしごとは、わたしもりのようなものだ。」

しゅくちょく室のひがきえた。夜つゆがおりてきた。

かしの木は、あくびを一つして、しめっぽくなった葉をふるわせ、それから、ねむりにおちていった。

二　手ということば

「手がよごれていますよ。」

「手がつけられません。」

「手がたりない。」

同じ「手」ということばにも、いろいろなつかいかたがあります。

じょうずなできばえをみたとき、感心して、思わず手をたたきます。

このときの「手」は、てのひらをさしています。「手をうつ」の「手」も、「手をあわせる」の「手」も、これと同じつかいかたです。

ところが、「かごの手」とか、「なべの手」となると、人の手ではありません。これは、持つところということになります。

また、「あさがおに手をやりましょう。」というときの「手」は、またすこしちがいます。これは、あさがおのだしている手のことではありません。あさがおのつるがまきつくように立ててある、竹や木のことをいうのです。

「きゅうりの手」や「まめの手」なども、同じです。

「手ならいをはじめましょう。」

「だいぶ手があがった。」

このときの「手」は、文字を書くことをさしていますが、どう

して、「手」ということばが、文字を書くことになってきたのでしょう。

「手をつくす。」

「いますこし、手をいれてみよう。」

「新しく手をつけた。」

このようなときの「手」は、どんないみにつかわれているのでしょう。

それとよくにたつかいかたで、「まいの手」といったり、「この手でやってみよう。」とかいったりします。

私どもの手が、さまざまなはたらきをするように、「手」ということばも、さまざまなはたらきをしてくれます。

つぎの「手」は、どんなつかいかたでしょうか。

「ゆく手に、まつの木が立っています。」

「すばらしいものを手にいれたね。」

「そんなに、手をやかせるな。」

「ちょっと、手にあまるしごとだな。」

「手にとるようによくわかる。」

同じことばで、ちがったつかいかたがあるのは、「手」だけではありません。

「はらがいたみだした。」

「はらをたてるな。」

「はらに思っていることと、いうこととが、ちがう人がある。」

「はらをかかえてわらった。」

「はらのすわった人だな。」

これは、「はら」ということばを、いろいろにつかったばあいを、しめしたものです。

「はなが高い。」「はなをならす。」

「口をだすな。」「口ごたえする。」

「はがゆい。」「はがたたない。」

私たちのからだの名まえに、このような、いろいろなつかいかたがあるのは、おもしろいではありませんか。

三　もんしろちょう

（一）

「ちょうちょ、ちょうちょ、なの葉にとまれ」の音樂が、ひびいてくる。

学校の運動場に、子どもたちが集まっている。

子どもたち「先生、早くでかけましょう。」

先生「じゃあ、でかけよう。はん長は、めいめいのはんのにんずをかぞえたかね。」

はん長たち「はい。」「はい、しらべました。」

はん長一「先生、きょうは風がありませんから、ちょうちょが、

たくさんとんでいるでしょう。」

先生「よくおぼえていたね。風のない日は、ちょうちょがよくでるのだったね。さあ、出発しよう。」

「ちょうちょ、ちょうちょ、なの葉にとまれ」の唱歌が、きこえてくる。

（二）

女の子一「このまえより、なの花がへっているわ。」

女の子二「そうね。」

女の子一「なぜかしら。」

女の子三「花がちって、実がつきはじめたからでしょう。」

女の子四「先生、この実はなににするんですか。」

先生「そんなに実をとっちゃいけない。よくみのってから、油をとるんだからね。てんぷらは、これであげるんだ。」

女の子一「あら、そうですか。」

男の子二「ああ、とんでる、とんでる。きょうは、ずいぶんとんでるなあ。」

先生「あぶないよ。川に落ちないように。」

男の子三「このまえきたときは、風が強かったから、ちょうちょがでなかったんですね。」

女の子二「それに寒かったし。」

男の子一「先生、風の日は、ちょうちょは、どこにかくれているんですか。」

先生「しげった草むらの中に、かくれているのさ。子どもたちは、小さな橋をわたる。」

男の子四「先生、こっちの白い花のはたけは、なんのはたけですか。」

先生「知っている人——」

子ども「はい。」「はい。」

先生「きしもとくん。」

きしもと「だいこんばたけです。」

先生「そうだ。よく知っているね。」

きしもと「私のうちでは、だいこんを、庭に二十本うえたんです。そのうち、たねをとるために、一本だけのこしておきましたら、それが、いまちょうど、こんな白い花をつけています。」

先生「それで知っているんだね。」

女の子三「あっ、白いちょうちょがとんできた。」

男の子三「白いちょうちょが、白い花にとまった。」

男の子四「あっ、こっちにも。」

女の子四「あっちにも。」

先生「とまっているちょうちょが、どんなかっこうをして、みつをすうか、よくごらん。ひとりびとり、ばらばらにわかれて、そっとね。」

子ども「はい。」

(三)

きしもとくんの家。きしもとくんが、弟のはるおくんと、ふたりで、本をよんでいる。日曜日のはれた朝。

はるお「にいちゃん。また、すずめがおりてきたよ。」

兄　「しずかにして、みていてごらん。」

すずめは、ぴょんぴょんとんで、庭のはたけの中を歩く。

兄　「すずめが、だいこんの葉をみているよ。」

ささやくように、

はるお「にいちゃん、すずめはなにしにくるの。」

すずめが、ぱっと、とんでにげる。

兄　「はるお、あまり大きな声をだすから、にげちゃったよ。」

はるお「ねえ、にいちゃん。なにしにくるの。」

兄　「あおむしをさがしにくるのさ。」

はるお「あおむしをとって、どうするの。」

兄　「子すずめにやるのさ。」

はるお「子すずめ、あおむしをたべるの。」

兄　「だいすきさ。」

そのとき、おかあさんがおいでになる。

母　「なにしてるの。おさらいを早くすませてから、お遊びなさい。」

兄　「おかあさん、あおむしのことを、話していたんですよ。」

母　「そう、それもお勉強ですね。あなたは、きょう、しいくびんのなっぱを、とりかえましたか。」

兄　「あ、わすれていた。もう、おさらいがすんだから、あおむしのせわをしよう。はるお、だいこんの葉を一まいとってきてね。ぼくは、びんの中をそうじして、す

なに水をやるから。」

はるおは、だいこんの葉をとってくる。兄は、しいくびんの中のすなに水をやる。

はるお「はい、だいこんの葉――どうして、葉をすなの中に立てるの。」

兄「かれないようにさ。」

はるお感心したように、「ふうん。」

兄「さあ、あおむしくん、新しいごちそうだ。」

兄は、二センチほどに大きくなったあおむしを、新しい葉にうつす。

兄「ねえ、おかあさん。先生も、あおむしをかっていらっ

しゃるって。」

母「あおむし、大きくなりましたね。たまごをとってしらべてから、なん日ほどたっているかしら。」

兄「ちょっとまってください。日記帳をみますから。」

日記帳をみながら、

兄「たまごから小さい虫になるのに、七日かかっています。それから十日すぎて、からだが黒っぽかったのが、青くかわってきたんですよ。」

母「はっぱと同じ色になったのね。どうして、はっぱと同じ色になるのか、わかりますか。」

「どうしてかしら。」

はるお「にいちゃん、わからないのかい。」
兄「なまいきいうな、はるお。」
母「これこれ、そんなこと。ねえ、はっぱと同じになるのは、鳥などに、すぐみつからないためですよ。」
兄「あ、そうか。」

（四）

それから、いく日かたったある日の午後。

はるお「にいちゃん、にいちゃん。」
兄「どうしたのさ。」
はるお「あおむしが、へんな色にかわっている。」

兄「ほんとうだ。おかあさん。黄色になっちゃった。」
母「さなぎになったのですよ。先生は、あおむしがさなぎになるって、教えてくださらなかったの。」
兄「いいえ、どうなるか、みんな自分でしらべるようにと、おっしゃっただけです。」
母「先生は、いいことをおっしゃいましたね。なんでも、自分でみつけていきましょうね。」
はるお「さなぎをふしぎそうにみながら、「これ、死んでいるの。」
母「いいえ、生きていますよ。これから、どうかわるでしょうね。」
兄「観察日記に、さっそく、これを写生しておこう。」

（五）

きしもとくんが学校から帰ってくる。

兄　「おかあさん、ただいま。はるおは」

母　「はるおは、さっきから、おもてで遊んでいますよ」

兄　「おかあさん。」

母　「　」

兄　「きょうね、國語の時間に、先生にほめられたの。」

母　「どうして。」

兄　「あおむしがさなぎになったところを書いたのが、よくできたって。」

母　「それはよかったね。どんなふうに書いたの。」

兄　「よんでみましょうか。」

母　「よんでちょうだい。」

兄　「自轉車のチューブのようにふわふわした、黒っぽい、かわいいあおむしは、だいこんのはっぱと同じ色にかわっていた。それは、すずめたちにたべられないためだと、おかあさんが教えてくださった。ぼくは、あおむしは、かくれみのをきているようなものだと思ったぼくは、学校から帰ると、だいこんのはっぱを、とりかえてやるのが楽しみだ。きのう、学校から帰ってみると、あおむしは、もう黄色なさなぎにかわっていた。

弟が、ぼくよりさきに、それをみつけた。

そこへ、はるおが帰ってくる。

はるお「にいちゃん、帰っていたの。まだかと思った。

母「いま、にいさんに日記をよんでもらっていたところよ。きょう、先生にほめられたんですって。」

はるお「いいな、にいちゃん。」

兄「さあ、はるお、いっしょに遊ぼう。」

立ちあがりながら、なにげなく、しいくびんをみる。

兄「おやっ、おかあさん、おかあさん。」

大きな声をたてる。

母「どうしたんです。そんな大きな声をだしたりして。」

はるお「にいちゃん、なあに。」

兄「ちょうになった、ちょうになった。」

はるお「ほんとうだね、にいちゃん。」

母「まあ、まあ。」

しずかな音楽がはじまる。

母「白いえのぐにみどりをとかしたような、美しいはねですこと。」

兄「あのはねをしぼったら、きれいなしるがでそうね。」

母　「おかあさんも、こんなところをみるのは、はじめてですよ。もんしろちょうのおたんじょうね。」

兄　「はねをふるわせている。」

母　「空氣にふれて、すこしずつのびるのね。」

なごやかな音樂がつづく。はるお、おかしな声で

はるお　「おや、ひげをはやしてる。」

兄　「ほんとう――ひげだね。」

はるお　「あかんぼのくせに、ひげなんか。」

兄　「ほんとうにきれいね。おかあさん、花よりきれいね。」

はるお　「ふしぎだな。あんなあおむしが。」

兄　「おかあさん、死ぬといけないから、ここからだして、

庭のだいこんの葉に、うつしてやりましょうね。」

母　「それがいいわ。」

はるお　「にいちゃん、早くいこう。」

兄　「きっと、とびだすよ。さあ、はるお、おいで。」

兄弟ふたりが、いま生まれたばかりのちょうちょを、しいくびんからとりだす。庭には、日光がふりそそいでいる。

母は、ふたりの兄弟をながめている。

明かるい音樂。

四　汽車の中

（一）

汽車の中は、人でいっぱいでした。

「もうすこし、中へはいれませんか」。

「そんなにおしたって、だめですよ」。

むりにわりこもうとする男の人もあり、足をふまれて、おこっている女の人もありました。

私と弟のさぶろうは、乗るには乗ったものの、動くことさえできません。

私は、さぶろうの手をしっかりにぎり、さぶろうは、私の

からだにすがりついていました。それでも、汽車がゆれるたびに、前後からおされて、さぶろうは、だんだん頭を私によせ、おしまいには、私とさぶろうとは、まるで、一つからだになってしまうかと、思われるほどでした。

私は、ありったけの力をだして、さぶろうをかばうように両手をつっぱりました。

家をでるとき、おかあさんに、

「だいじょうぶです。おばさんのうちへは、もう二どもいったことがあるのですもの。それに、乗りかえもないし、二時間ほどでつくのですから」。

とうけあって、さぶろうをつれてきたのでした。

「もうすこし、中へいれてくださいませんか。」
「だめだよ。とてもはいれないね。」
私は、ほんとうにこまってしまいました。
「さぶろうさん、もうすこし、がまんしていらっしゃい。」
私はそういって、どうぞぶじにつきますようにと、心の中でいのっていました。
「ここに子どもがいる。かわいそうだ。」
頭の上で声がしました。すぐうしろのおばさんも、
「どうかして、中へいれてやれませんかしら。」
と、心配そうにいいました。
すると、なんだか、まわりがすこしゆるやかになり、からだがらくになったような氣がしました。私は、さぶろうのかたに手をかけて、

「さぶろうさん、だいじょうぶ。」
ときいてみました。人ごみのうすぐらい中で、さぶろうは、元氣よくにこっと、私をみあげました。
だれかが、
「頭はどうきょう、足はおおさか。」
といったので、みんながわっとわらいました。
そのとき、ふと上を向くと、私のよこのわかい男の人が、ただひとり、わらいもせずに、両方の手でまどわくをおしています。私たちのために、せいいっぱいの力で、すきまをこ

しらえてくれていたのです。私は、思わず、

「どうもありがとうございます。」

と、頭をさげました。

「さあ、いまのうちに、さきの方へいらっしゃい。」

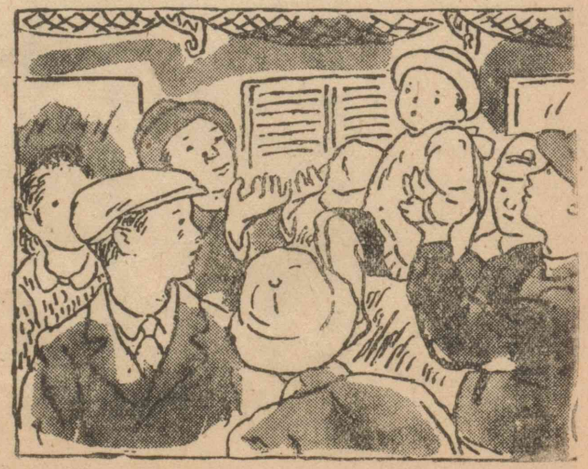
うしろのおばさんがいってくれましたので、私は、人と人のあいだをかきわけていこうとしました。しかし、弟の手をひいているので、ひとあしすすむにも、よういではありません。

そのとき、そのわかい男の人が、

「さあ、リレーにしよう。」

といったかと思うと、いきなりさぶろうをだきあげ、となりのおじさんの目のまえへ、つきだしました。おじさんは、わらいながらさぶろうを受けとって、つぎの人にわたしました。それから、つぎからつぎへ、「よいしょ。」「よしきた。」「それっ。」と、送ってくれました。

はじめ、さぶろうは、足をちぢめて、心配そうに私の方をみていましたが、三人めと、四人めと、高いところをメデシンボールのように送られていくうちに、にこにこ顔になり、と



うとう、うれしそうに、声をたててわらいました。
乗客は、高いところをわたっていくさぶろうを、おもしろそうに、みおくっていました。
私は、いそいで、さぶろうのあとを追いかけました。
さぶろうは、だれかにゆずってもらった席の上に立って、
「ねえさん、こっち。」
と、私を手まねきしています。
私は、さぶろうの方に近よりながら、車中の人たちに、心の中でお礼をいいました。

（二）

私は、D・D・Tを、頭から、首すじから、せなかから、はらまでふりまかれて、ちょうど、かふんにまみれたみつばちのようになって、汽車でねむっていた。
ふいに、はくしゅがおこった。目をさますと、向こうの席にひとりの青年が立っていた。かれは、むねに、大きなぴかぴかしたアコーデオンをだいて、ワルツの曲をひきはじめた。汽車は、かなり早く走っているので、青年のからだはゆれていたが、ひく手にくるいはなかった。かるやかなしらべは、朝の光のように氣持よく、車中のすみからすみまで流れた。
青年は、つづいて日本の子もりうたをひきはじめた。ごくありふれた曲であったが、旅をしてきた私には、しみじみと

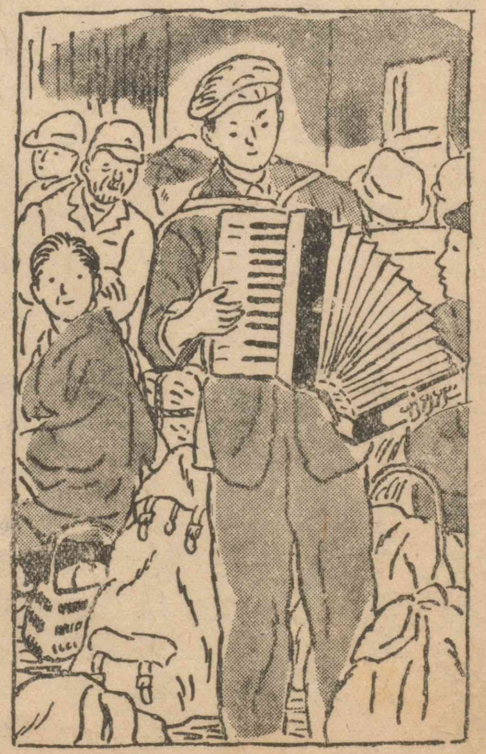
きかれた。

汽車はトンネルにはいった。しかし、青年は、ひく手をやめないで、いっしんにひきつづけていた。

トンネルをでたとき、向こうの席で、

「みなさん。」

と、大きな声をだした人があった。みると、しらがの老人である。



「みなさん、たいへんさしでがましいことですが、わたしにちょっと話をさせてください。」

車中の人たちは、みんなこの老人をみた。

「わたしは、終戦後、いつも心さびしい旅をしていました。けれども、きょうは、楽しい旅行をしております。どこのどなたかはぞんじませんが、楽しい音楽をきかせてくださる心持を、ほんとうにありがたく思います。はなはだでしゃばったことかもしれませんが、このかんしゃの氣持を、あらわしたいとぞんじます。みなさん、いかがでしょう。」

はくしゅが四方からおこった。

そこで、老人は、自分のかぶっていたぼうしを、そばの人

の手にわたした。ぼうしは、つぎつぎと人々の手をわたり、お金がその中にたまった。私のまえにもぼうしがきた。私も喜んで、いくらかのお金をそれにくわえた。

車中をひとまわりすると、ぼうしは、ふたたび、しらがの老人のところにもどった。老人は、

「ごあいさつをします。」

といって、青年のまえにすすみでた。

「たいへん失礼だと思いますが、これは、車中の人たちのこころざしであります。お受けとりください。」

青年はにっこりわらった。

「みなさん、ありがとうございます。」

ここで、ちょっとことばを切った。

「でも、わたしは、こんなことになろうとは、思っていませんでした。また、こんなつもりでひいたのでもありません。ただ、たいくつまぎれにひいたのです。せっかくのおこころざしですが、このお金はいただきかねます。」

そういってから、老人にぼうしを返した。それから、二三どのおし問答が、ふたりのあいだにとりかわされた。

おしまいに、青年は、大きな声で、

「では、ありがたくいただきます。」

といって、おじぎをした。

「それでは、お礼にわたしのいちばんとくいな曲を、一曲ひ

きましょう」。

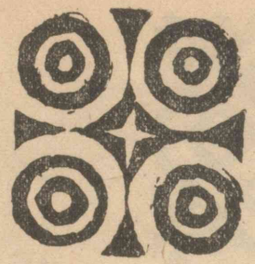
これをきいて、みんなは、またはくしゅをした。青年は、アコーデオンを、両手でぐっとひろげたかと思うと、しずかにひきはじめた。名高いオペラの序曲である。

私は、汽車のまどから、夕ぐれに近いそとをながめた。黄みがかった麦ばたけ、縣道らしい白っぽい道、そこを自轉車に乗って走る中学生、たがやしている父と子、きりの花——曲は終った。ちょうど、汽車もとまった。青年は、すわって、アコーデオンを黒ぬりのケースにおさめた。

駅は、東北本線の「はないずみ」であった。駅の名も美しくよまれた。

五　作文

（一）



思っていることを、はっきり書きあらわそうとすると、文章が、だんだんくわしくなっていきます。

どこまで書きたしても、それでいいというところまでは、なかなか、いきつくものではありません。

文章は、心の鏡のようなものです。心がはっきりとしていますと、文章も、だんだんはっきりします。心がくもっていると、いくらなおしても、文章のくもりはとれません。

つぎに「ドッジボール大会」という文章が、二へんあります。はじめに書いたのと、二回めに書いたのとを、くらべてごらんなさい。二回めのは、書きたしてあるだけ、よむ人に、はっきりと、そのようすがわかります。

ドッジボール大会

六日の日、学校ぜんたいのドッジボール大会があった。

ぼくも、一組のせんしゅになって、いっしょうけんめいにやった。

はじめに、二組とやった。ぼくのほうは、センターが外

野へでてしまったので、あいてのセンターが、

「勝つ、勝つ。」

とさわいだ。

それで、内野の人はいっしんになったので、かえって、ぼくたちのほうが勝ってしまった。

第二回めには、五年一組とあいをした。これも勝つことができた。

さいごに、六年二組とやることになった。あぶなかったが、わずかのちがいで勝った。

ぼくは、うれしさでいっぱいになった。

ドッジボール大会

いよいよ、ドッジボール大会がはじまった。どの学年のせんしゅも、みんな、運動場に整列して、式をあげた。

はじめに、ぼくたち一組は、二組とが、しあいをすることになった。ぼくたちは、すぐコートへでていった。

たかやま先生が、

「しっかりやれ。」

と、元氣づけてくださった。

「ピー」。と、用意のふえが鳴った。

しんぱんのかわむら先生が、

「じゃんけんをして、いいほうのボールをつかいなさい。」

といわれた。

ぼくらのほうのボールをつかうことになった。ふえがまた「ピー」。と鳴って、しあいがはじまった。ぼくらのほうが、どんどんあてられて、センターまで、外野にでてしまった。ぼくもあてられた。

二組のセンターが、喜んで、

「勝つ、勝つ。」

とさけんだ。ぼくは氣が氣ではない。みかたのおうえんだんが、「フレー、フレー」。と、大声をたてる。のこったもの

がふんどうした。やがて、「ピー」と、ふえがひびいた。
思いがけなく、ぼくたちの勝となった。
「場所こうたい」。
かわむら先生のあいずで、ぼくらは場所をこうたいした。
すぐまた、しあいがはじまった。むちゅうでやっていると、
「ピー」。と鳴った。どちらが勝ったかと思って、心配してい
ると、十一たい十で、ぼくらのほうが勝った。
うれしいような、すまないような氣持がした。
第二回めは、五年の一組とやることになった。このとき
は、ぼくらのほうのボールが、よくあいてにあたって、ち
ょっとのあいだに、勝つことができた。

こんどは、さいごの決勝戦だ。あいては、いままでいち
ばん強い六年の二組だ。
たかやま先生が、
「さあ、こんどがだいじだ。みんな元氣でやるんだ」
と、はげましてくださった。
学年が上だけに、あいては、大きくて強そうだ。
「ピー」。はじまった。
「しっかりやれ」
おうえんの声が耳にひびいてくる。
センターが、外野のセンターにれんらくをとって、どん
どん、あてにあてた。あいてのセンターは、ぼくをねらっ

た。ボールがビュッととんできた。ぼくは、しっかり受けとめて、すぐセンターにわたした。ボールは、すばやくあちこちにとんだ。そのたびに、「ワアッ。」という声がおこった。ふいに、ボールが、ぼくのところにとんできた。ぼくはよこだきに受けとめた。あぶなくころびそうになった。

「ピー。」はくしゅがおこった。ぼくたちの勝である。

みんな、また運動場に集まって、終りの式をした。ぼくは、うれしくて、むねがどきどきしていた。式をすませてもどってくると、たかやま先生も組の友だちも、みんな、にこにこしていた。

（二）

しかし、文章は、くわしくしさえすれば、はっきり写しだすことができるとはかぎりません。そのはんたいに、ふでをいれるほど、かえって、文章がみじかくなっていくことがあります。

心にはっきりとえがかれた一つのかたちは、まじりけのないほう石のようなものでありますから、よけいなことばは、ちりほどもあってはなりません。

○

五年生が、運動場で、たいそうをしています。

一年生の唱歌がきこえてきます。

○

つばきの花がまっかにさいています。
根もとに、ぽたぽた落ちています。

○

海がみえます。
家と家とのあいだに、ほそ長く光っています。

○

明かるい月夜です。
そこらで、虫が鳴いています。

○

つむじ風が、わたしのまえを走っていく。
紙が、くるくるまいをしてとんでいる。

○

ろうかを曲がったら、
ふっと、風がふいてきた。

○

おかあさんの鏡、
庭のはっぱがうつっている。

○

ほたるを三びき、つかまえました。

○

雨がはれて、にじが大きくでました。

○

たんぼの上で、つばめがちゅう返りをした。

○

あさがおの花が、ラジオの音樂をきいています。

○

ほそい雲が、ますますほそくなる。

○

おかあさん、いま、柱時計がとまりました。

○

黄色いやまぶきの花に、黄色いちょうがとまっています。

こんなのは、みじかくなった文ですが、まだ、みがきあげられたことばということはできません。つぎのはどうでしょう。

○

なにかの花びらが、
くものすにかかってゆれている。
土の上、一センチほどのところで。

○

ボタンと音がして、
まりが、そとからとびこんできた。

よっちゃんたちの話し声がする。

○

考え考え歩きまわるような、
大きなあり。
スリッパのへりをひとまわりして、
帰っていった。

○

よく落ちるかきの実。
いまに　一つもなくなるだろう。
またしても、ポトンと音がする。

○

ききだけみえることし竹が、
ざわざわと、動いている。
うす黒い雲は、どこかへいってしまったのに。

○

まよったせみが、かきの木につきあたって、
バタバタやって、にげていった。

○

ひとところで、からすが鳴くと、
あっちでもこっちでも鳴く。
こんなに、からすがいるのかしら。

○

すみをすっている。めじろの声がきこえている。

○

雨がふる。風がふく。さくらの木が、ぬれてゆれている。

○

四年生の樂しさよ。さくらの花をしらべてみたり——

○

どの花も、みんな空を向いている。日がてっている。

○

なの花ちらほらさきはじめ、うすぐもり。

○

小さな虫がかたまって、顔のところでとんでいるくれがた。

○

ぱくちく花火が、パンパン、もうくらくなっている。

○

まめのつるがまきついて、まきつくものがなくなったためのつる。

○

夏の風がふきこんで　新聞など動かして、ふきぬける。

○

しずかに波がよせている。みんな、おべんとうをたべている。

○

ふえの音、虫の声、三日月さん。

○

毎日書いてきたあさがお日記。はつ花のさいたこと、けさ書く。

○

いつのまにか、葉ばかりのさくらになって、毎日はれ。

○

波の音がきこえている。子どもの声がきこえている。

○

あっちでもこっちでも、だっこく機。麦のとりいれ、日がてりつける。

○

どんどん、どんどん、うえていく。みんなそろって、うえていく。

○

もやのかかったおきの島、ポンポン船がでかけていく。

○

雨あがりの麦のほ、子どもと子どもとかけていく。

○

もみじがまっかで、山のいもをほっている人が二三人。

○

ふろからみてる十三夜さん。雲一つうかんでいる。

○

青々とはれて、すすきすこしゆれている。

○

うら山に、みかんを持って遊びにきている。よい天氣。

○

うめがさく。方々のうちで、ふとんほしてある。

○

炭を切る音も小鳥の声も、夕がたになっている。

（三）

人の顔をちょうこくするのに、二つのやりかたがあります。

一つは、はじめほね組みをこしらえてから、それにねんどでだんだん肉づけをし、しだいに、その人の顔ににせていくやりかたです。

もう一つは、だいりせきや木材をけずっていって、だんだん、その人の顔ににせていくやりかたであります。

まえのやりかたは、ちょうど、文章をくわしく書きたすのににています。あとのやりかたは、文章をきりつめていくのと同じです。

やりかたはいろいろですが、ねらいどころは一つです。心に思ったことを、はっきりと写しだすということなのです。

六　月明かり

たっぷりと、
春は、
小さな川にまで、
あふれている、
あふれている。

くれがたの庭そうじ、
それがすむのをまっていたのか、
すぐうしろに、
月は、音もなく、のっそりとでていた。

もやが深いから、
遠いような、
近いような、
月明かりだ。
なんの木の花だろう。

にわか雨は、
ぐっしょりとぬらした。
うまもうまかたも、同じように。

ぬまの上を、にわか雨が通る。
そのずっと高いところでは、
ひばりが一つ、さえずっている。

うまよ、
そんな大きなりをして、
子どものように、
からだまであらってもらっているのか。
あ、ほたるだ。

だあれもいない。
うまが、

水のにおいを
かいでいる。

ぼさぼさのいけがきの上である。
ぼたんでもさいているのかと思ったら、
まあ、子どもが
わらっていたんだよ。

みんな、

集まれ、
集まれ。
そうして、ぐるりとわをかけ。
いま、まっぷたつになるすいかだ。

七　にげたらくだ

一の場面

人　一と二、ほかに、ひとりの旅人。
ところ　さばくの中。

一と二のふたりが、あちこちをみまわしながら、なにか、ものをさがして歩いてくる。

一　「どこへいったのだろうね。」
二　「ちょっとのまに、いなくなってしまった。さて、どこへいったものかしら。」
ふたりそろって、遠くをみまわす。
一　「すなのほかに、なにもみえない。」
二　「木一本もみえない。」
そこへ、ひとりの旅人がやってくる。
旅人「もし、もし。」
一と二が、いっしょにふり返って、
一　二「はいはい。なんですか。」
旅人「あなたがたは、なにかさがしておいでのようだが」

一　「そうです」。

二　「さきほどから、さがしつづけているのですが」。

旅人「もしや、あなたがたは、らくだをにがして、それをさがしていらっしゃるのではありませんか」。

ふたりは、びっくりした顔で、

一　二「そうです。そうです」。

旅人は、おちついたことばつきで、

旅人「そのらくだは、かた目ではありませんか」。

ふたりは、なおびっくりして、

一　「まったくそのとおりです」。

二　「かた目なんですよ」。

旅人は、思いだすようなふうをして、

旅人「そうして、左の足が一本短くて——それから——」

といってから、ちょっと考える。

このようすを、一と二のふたりがみてとって、なにか、こそこそささやきあう。

旅人「そうそう、そのらくだは、まえ歯が二三本ぬけてはいませんか」。

ふたりは、いよいよびっくりして、

二　「それにちがいありません」。

一　「どこでみましたか」。

旅人は、それには答えないで、また思いだしながら、

旅人「それから、つけた荷がありましたね。」
一　二「ありました。」
旅人「その荷は麦でしょう。」
一　「たしかに、たしかにそうです。」
二　「どこにいるか、早く教えてください。」
旅人「いや、わたしは、そのらくだをみたのではありません。」
一　「え、でも そんなにくわしくごぞんじではありませんか。」
二　「それとも、だれかにおききになったのですか。」
旅人「いいえ、みたのでも、きいたのでもありません。」
ふたりは、また顔をみあわせていたが、
一　「どうもおかしい。あなたは、そのらくだを、どこかへ

つれていったのにそういない。」
旅人はおどろく。
二　「あやしい。さあ、けいさつしょへ、いっしょにいってもらおう。」
旅人「そんな。」
一　二「いや　あちらで、あかしをたててもらおう。」
ふたりは、旅人の両手をとる。むりにつれていく。

二の場面

人　旅人。一と二。けい官。
ところ　けいさつしょ。

旅人と一と二が、ならんでいる。けい官がはいってくる。

けい官「いったい、どういうことなのか、くわしく話しなさい」。

一「私どもは、麦をつけたらくだをつれて、さばくを通っていましたが、どちゅうでひと休みしているうちについ、ねむってしまいました」。

けい官「それで、どうした」。

二「目がさめてみると、らくだがいません。おどろいて、方々をさがして歩きましたが、みあたりません。そのとき、この人にであったのです」。

けい官「それから」。

一「すると、向こうから、らくだをにがしたのではないか」。

と、たずねるのでございます」。

二「それに、もっとあやしいことは、この人は、私どものらくだのことについて、それはよく知っております」。

けい官「どんなことを、知っているのかね」。

二「だいいち、らくだがかた目であることを知っていました。そのとおり、私どものらくだは、かた目でございます」。

一「らくだがびっこであることも知っていました。しかも、左の足の短いことを、ちゃんと知っているのです」。

けい官「ほかにまだ、知っていたかね」。

二「はい、知っていました。らくだのまえ歯が、二三本ぬ

けていることまで。」

一「そのうえ、つけていた荷物の品まで、知っているじゃありませんか。」

一二「らくだをぬすんだのは、この男にちがいありません。どうぞ、おさばきをお願いします。」

けい官「ふたりのいうことは、よくわかった。」

旅人をみて、

けい官「なにか、そちらにも、いいぶんがあるかね。もしあるなら、ここで、はっきりいうがいい。」

旅人「はい、申しあげます。私がさばくを旅していますと、すなの上にらくだの足あとがつづいていました。それ

なのに人の足あとがみえません。それで、このらくだはどこかからにげてきたのだろうと、思ったのです。」

けい官「なるほど。それから、そのらくだがかた目だということは、どうしてわかったのかね。」

旅人「それは、こうです。道のかたがわの草ばかりたべてあったからです。」

けい官「なるほど。して、びっこということは。」

旅人「それは、かた方の足あとが、一つおきにあさくなっていましたので。」

けい官「では、まえ歯のぬけているということは、なぜわかったのか。」

旅人「草をくいとったあとをみますと、かみきれないで、のこっている葉がありました。それで、歯が二三本ぬけているにちがいないと、考えました。」

けい官「きいてみれば、いちいち、もっともなことばかり。」

一「もしもし、それなら、荷物をつけていることが、どうしてわかったのでしょう。」

二「そうです。それが麦だということが、なぜわかったのでしょう。けい官どの、それを、しらべていただきとうございます。」

けい官「それについて、なにか。」

旅人「それはほかでもありません。道に、麦がこぼれていた

からです。」

けい官「よしよし、よくわかった。らくだは、あなたがぬすんだのではない。もう帰ってもよろしい。」

旅人は、うれしそうに立ちあがる。けい官は、ふたりのものに向かって、

けい官「あなたがたふたりが、あの旅人をうたがったのも、むりはない。けれども、いまの答で、知っていたわけがはっきりしたでしょう。もう、うたがいははれたことと思う。早くいってらくだをさがしなさい。あまり遠くへいかないうちに。」

一と二のふたり、いそいでたちさる。

八　うさぎ日記

4月28日（土）晴　19度

私たちは、うさぎをかうことになりました。先生が、黒いうさぎと、白いうさぎと、茶色のうさぎを、かごにいれて持っていらっしゃいました。私たちで、めかたを計りました。

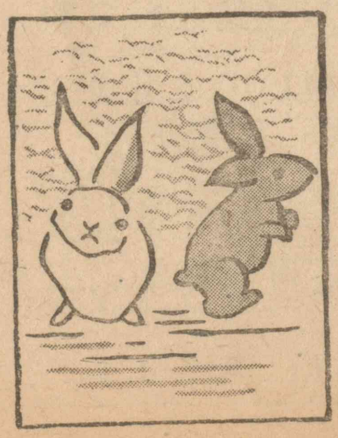
黒うさぎ 390g.　白うさぎ 400g.　茶うさぎ 1kg.

4月29日（日）晴　20度

草をやったら、3びきとも、せっせとたべました。

うさぎはどんな草を、いちばん喜んでたべるか、しらべてみることにしました。きょうは、れんげそうとなたねの葉をやりました。

4月30日（月）晴　19度



うさぎは、すこしもじっとしていません。いつも、どこかを動かしています。

5月1日（火）くもり　19度

うさぎは、にんじんを、とても喜んでたべました。

5月5日（土）雨　15度

にんじんとじゃがいもをやったら、黒と白が、けんかをしてたべました。

5月6日（日）雨のち晴　15度

はこべとおおばこをやったら、にんじんをやったときのように、喜んでたべました。

5月20日（日）くもり　18度

うさぎは、新しい草をいれてやると、そればかりたべて、まえにたべのこした古い草は、ふみつけるだけで、ちっともたべません。

5月22日（火）くもり　16度

うさぎは、みんなで、13びきになりました。白うさぎが9ひきと、黒うさぎを1ぴきもらいました。

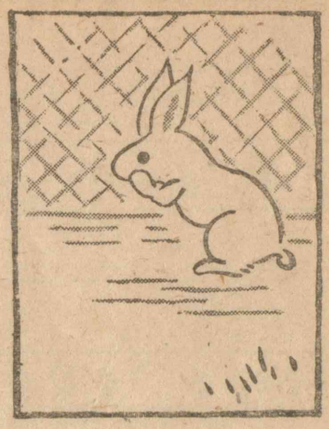
茶うさぎ	1ぴき
白うさぎ	10ぴき
黒うさぎ	2ひき

5月28日（月）晴　23度

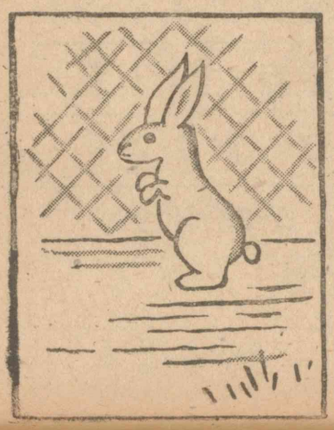
よく晴れた日には、とても元氣があります。うさぎでも、くもった日や雨ふりの日は、きらいなのでしょう。

5月29日（火）くもり　24度

よくみていたら、ねこが顔をあらうように、うさぎも、まえ足で、耳や顔をなでていました。



5月31日（木）晴　28度



うさぎがうしろ足で立ちました。が、すぐ、まえ足をおろしてしまいました。

6月25日（月）晴　27度

うさぎのふんを、水の中へいれてみたらうきました。うさぎのふんはまんまるです。

6月28日（木）雨　28度

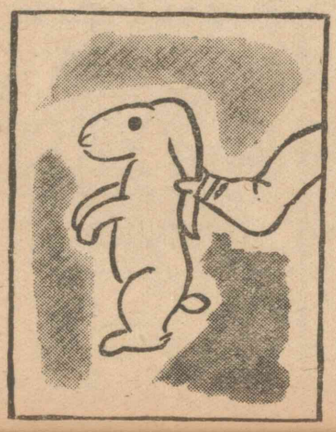
このごろは天氣がわるいので、うさぎは、元氣がありません。なるべく、こくるいをやるようにして、ぬれた草はやらないように注意しています。

7月9日（月）晴　26度

私が麦をやったら、白いうさぎは、早くたべたいのか、黒いうさぎの上に乗って、たべました。

7月20日（金）雨のちくもり　22度

うさぎ小屋のそうじをしました。小屋からだすとき、みんな喜んですぐでましたが、1ぴきの白いうさぎと、茶色のうさぎは、おくへはいってでてこないので、小屋へ頭をいれて、だきあげて、そとへだしました。だすときに、わらを足でけったりして、あばれました。



7月24日（火）くもり　19度

うさぎの毛の長さを計ってみたら、白は2cm、黒も2cm、茶は1·5cmでした。

そうじをしようと思って、首のところを持って、かごの中へいれたら、キューと、高く鳴きました。

8月2日（木）くもりのち晴　29度

朝、いってみたら、右から四ばんめのへやに、子うさぎが4ひき生まれていました。

8月4日（土）くもり　25度

茶色のうさぎがはいっているへやに、えさがなかったので、かこいの鉄ぼうを、かじっていました。

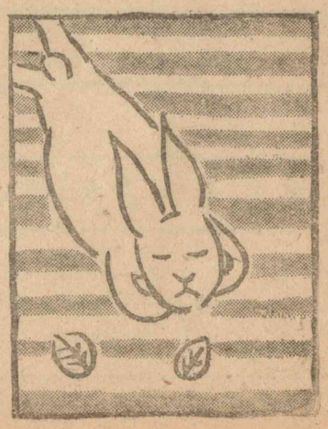
子うさぎの生まれた、右から四ばんめのへやに、黒い小さな虫が、たくさんいました。

9月3日（月）くもり　25度

けさ、白うさぎは耳にけがをしました。ほかのうさぎがかんだのです。しばらく動かないで、いたそうにしていました。

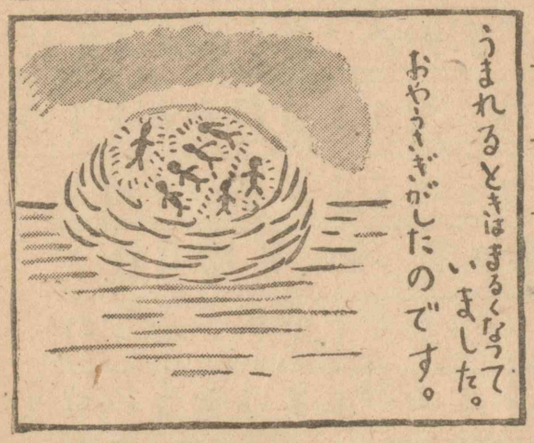
9月6日（水）くもりのち晴　29度

お晝に、うさぎのところへいってみたら暑いのでねむっていました。あと足を長くのばして、まえ足をむねの下にいれていました。



10月23日（火）雨　20度

うさぎのせなかをさかさになでると、毛がふわふわととびます。寒くなったので、むしろで戸をこしらえてやりました。



11月11日（日）晴　19度

けさ、いってみたら、左がわのへやに、毛がたくさんぬけていました。よくみると、おくの方に、わらがすのようにふくらんでいて、その中に、わたのようなふわふわした毛が、いっぱいはいっていました。その毛にくるまって、うさぎの子が7ひきいました。1ぴきは白で、あとのは黒っぽい色をしていました。

11月13日（火）晴　12度

7ひきの生まれたばかりの子うさぎは、わらの中の毛の中で、元氣に動いています。1ぴきのこらず、じょうぶにそだてたいと思います。

11月22日（木）くもり　17度

7ひきの子うさぎのうち、5ひきはねずみ色、1ぴきは白もう1ぴきは黒でした。ねずみ色の4ひきは、生まれてから12日めのきょう、みんな、目があき、からだには、すっかり毛がはえました。

11月25日（日）晴のちくもり　17度

白の子うさぎは、親について、はじめて、すからはいだしてきました。草のそばにきて、口をくっつけましたが、草はたべませんでした。

11月26日（月）晴　19度

ねずみ色の子うさぎが、きょうは、すからでて歩いていました。そうして、にんじんのやわらかそうな葉を、たべていました。黒の子うさぎが、ちちをのもうとして、親うさぎのちちにすがりつきますと、親うさぎは、足でけって、のませませんでした。うさぎは、人がみていると、ちちをのませた

くないのでしょうか。

11月29日（木）雨　13度

朝早くいってみたら、子うさぎはすの中でねていて、親うさぎだけが、草をたべていました。お晝ごろみたら、子うさぎは、7ひきとも、すからでて歩いていました。

12月1日（土）晴　13度

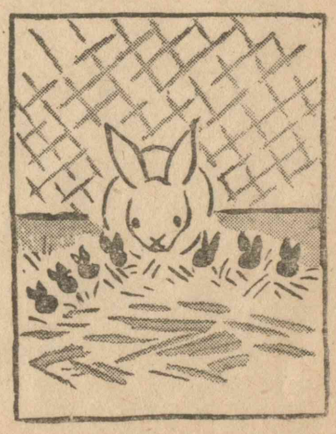
子うさぎが生まれてから、きょうで21日めです。子うさぎと母うさぎのめかたを計ってみました。母うさぎは4kg、子うさぎは、おもいので320g、かるいので260gでした。

12月2日（日）晴　15度

子うさぎの毛の長さを計りました。耳の長さも計りました。耳の長さは、白と黒は5cm、ねずみ色は6cmでした。

12月4日（火）晴　14度

けさみたら、母うさぎと7ひきの子うさぎは、頭をそろえて、なかよくにんじんをたべていました。よいぐあいに、みんな元氣よくそだっているので、安心しました。



庭 (4)
舎 (5)
歌 (7)
黄 (8)
卒 (9)
業 (9)
油 (18)
橋 (19)
曜 (21)
兄 (22)
帳 (25)
午 (26)
後 (26)
観 (27)
察 (27)
轉 (29)
前 (35)
頭 (35)
客 (40)
席 (40)
曲 (41)
老 (42)
戰 (43)
失 (44)
序 (46)
縣 (46)
線 (46)
章 (47)
回 (48)
郡 (48)
外 (49)
内 (49)
整 (50)
式 (50)
短 (77)
歯 (77)
判 (79)
官 (79)
晴 (86)
注 (91)
暑 (94)

國語第四学年上
Approved by Ministry of Education
(Date Nov. 1, 1948)

昭和二十二年三月三日 鐫刻発行
昭和二十二年十二月二十日 再版鐫刻発行
昭和二十三年十一月一日 修正鐫刻印刷
昭和二十三年十二月八日 修正鐫刻発行
(昭和二十三年十二月八日 文部省検査済)

(昭和二十四年度第一次発行)

定価 金 円 戔

著作権所有 文部省

鐫刻発行者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社 代表者 長得一

鐫刻印刷者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社堀船工場

印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社

発行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社